

【 10 】

氏 名	上 田 吉 一 うえ だ よし かず
学位の種類	教 育 学 博 士
学位記番号	論 教 博 第 7 号
学位授与の日付	昭 和 44 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	精神的に健康な人格の概念に関する研究

論文調査委員 (主 査) 教授 下 程 勇 吉 教授 倉 石 精 一 教授 佐 藤 幸 治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の著者は、著名な心理学者、ことに臨床心理学者の見解を参照し、これを検討しつつ、精神的な健康の在り方・構造・概念を究明しようとしている。

本論文は6章からなり、第1章においては精神的健康の概念規定の方法について論じ、臨床的方法が、個人の徹底的分析と総合的理解を通じて人間の本質をとらえようとしている点を高く評価する。そこでまず臨床経験から精神的健康を論じている S. Freud, A. Adler, K. Horney, E. Fromm, C. Rogers, V. Frankl 等の諸学者や G. Allport, A. H. Maslow 等著名な人格心理学者の精神的健康の概念を検討し、「統合性」「自己客観化」「社会的順応性」「社会的独立性」「情操」「情緒的安定感」「自己統制」「自発性」の8の観点を設定した。この観点について、それぞれ具体的特性の記入を求めるために、「教育に関するアンケート」用紙を作成し、精神病院の児童クリニック、少年鑑別所、児童相談所等の臨床家（精神科医・心理学者）125名に配布した。かくて、精神的に健康な人格に関する諸家の概念と、日本の臨床家に対するアンケートの結果を総合して、「健康な人間とは、現実との接触を維持しながら、人格の総合を最大限にたかめることのできる人間である」と定義している。

第2章においては、上記の定義にもとづいて、人格の健康性を現実のつながりの側面から論究したものである。すなわち、ここでは現実とのつながりを現実認識のありかたと現実接触のあり方とに大別し、前者についてはその病理学的歪曲を、具体的事例によって攻究し、その反対概念としての健康な人格にみられる正しい現実認識の特質を記述しようとした。ついで、後者の現実的接触の観点にいても、現実との生きた触れあいを失わない健康な人格の特性を究明しようとした。

第3章も、人格の健康性を、その最も基本的な要件である統合性という観点から考察したものである。ここでは、まず健康な人格と統合性の関係を記述した後、著者自身とり扱った若干の事例を通じて人格の分裂葛藤の様相を整理した。ついで統合的人格の意味を、S. Freud, K. Lewin, G. Allport, A. L. Baldwin, P. Lecky 等の理論を参照しつつ論究し、健康な人格にみられる統合性のあり方を、1) 課題に

対する熱中 2) 自主的態度 3) 自己の言動に責任をもつ態度 4) 未来指向性 5) 真の自己を自発的に表現する の5点にまとめている。

第4章では、はじめに欲求と健康の関係を論じ、ついで積極的に健康な欲求として創造への欲求をとりあげた。創造するためには、1) 基本的欲求の充たされた人格、2) 経験を広く受けいれる人格、3) 評価基準は創造者自身が設定したものであること、4) 創造のはたらきは、単に知的、観念的水準における活動ではなく、人格の根元的生命力の開展であること等の要件が必要であると論じている。

第5章では、健康な人格の核心をなすものとして健康な自我をとりあげた。まず主体としての自我、客体としての自我を概観し、自我の病理として自己疎外の心理学的構造を究明した。ついで健康な自我に関し、自己受容と自己客観化の二面より考察を加え、自己客観化の特性を強調すべきことを説いている。そしてこの両者の関係については、自己受容があって、はじめて正確な自己客観化が可能であることを指摘している。

第6章は健康な人間関係を論じたものであるが、自己受容と他者受容の関係を明らかにし、健康な人間関係の特徴として、正確な他者認知、好意と好感、相手人格の尊重、自由な意志伝達及び共感について論及した。

以上、精神的健康性を新しい人間価値としておき、従来から積重ねられてきた臨床上の知識、経験をもとに、健康な人格の具体的な概念を、把握しようと試みたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、人間科学的な知識、経験を背景として、精神的に健康な人格の概念を教育人間学的に把握しようとしたものであり、この分野の教育人間学的研究が、なおほとんど手がつけられていないだけに、その着想は先駆的であると認められる。

著者のこの主題に関する研究は10年余りの長期にわたり、内外の文献をひろく検討し、着実に吟味し、ここから得られた知識と、著者自身の経験を、精力的に統合した努力は高く評価される。

論述には、やや簡潔さに欠ける点も見られるが、著者はねばり強く論文の目的を追求している。就中、現実認識のあり方と現実接触のあり方の両面よりの探究は緻密なものであり、これらと人格統合性との二重構造化に着目していることは、精神的健康の指標の羅列にとどまる従来の見解よりも、一步人格の構造連関にふみ込んで人間の全体構造を把握している点で、教育人間学的にすぐれていると思われる。

要するに本論文は、臨床的視野による健康概念を導入し、人間の全人的形成に資する洞察を提供していることは、教育学に対する一貢献であると考えられる。

よって、本論文は教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。